

ともなりくんの珈琲店

数年前に亡くなった

ともなりくんが

念願だった

珈琲店をはじめたとき

興味津々で

行ってみると

そこは

夕日のきれいな

日光黄菅が満開の

丘の上

掘っ建て小屋のような

珈琲店の

テラス席

珈琲を注文すると

風が吹き

あたりが黄色い光で

満たされる

この丘から眺める

夕日は美しい

日光黄菅の黄色い花が

夕日の美しさを
増している

やがておとずれる

闇

珈琲店にあかりが灯る

ひと段落ついた

ともなりくんの

幸せそうな笑顔が

珈琲色に染まっているので

これでひと安心と

桜並木の

小径をくだる

来年の春

もう一度

桜色にそまる夕日をながめながら

ともなりくんの珈琲店で

美味しい珈琲を

飲みたいものだ

思いながら歩いていると

丘の上から漂う

珈琲の香りが

再会を約束してくれたので

その日を楽しみに

丘をくだる

港の見える公園

みこさんが

港の見える公園で待つというので

急いででかけたが

四方を山に囲まれた

標高六百五十メートルのまちに

港の見える公園などあるのだろうか

とまどっている

大きな蔵に住む

家庭教師のおおつきさんに

聞いてみようと訪ねたが

おおつきさんは不在

こうなれば

みこさんに会うことは

あきらめるしかないのだろうか

それでも

港の見える公園を探し歩き

鉢伏山の頂上にたどりつく

夏の終わり

大草原の真ん中に

立っていたら

まるで

青春真っ盛りのような気になるから

不思議なものだ

低空飛行で
飛び続ける
おにやんまを見ながら
頂上付近の珈琲店で
漂う珈琲の香りに酔いしれながら
考えている
やがて
草原に吹く風とともに
珈琲の香りも
おにやんまもどこかに
消えてしまった

黄昏時

鉢伏山の頂上から
夕陽に染まる
広大な雲海を眺め
ここが
港の見える公園だときづいたが

時すでに適し

周囲は闇につつまれた

結局

みこさんにあえることなく
未練の気持ちを残しながら
暗闇の
鉢伏山を
下山する

柱時計

柱時計の

ゼンマイネジを巻き忘れたので

街中が混乱し

朝礼で市長は

脂汗をながしながら

弁解する

ネジ巻き担当だった

あかはねくんは

まるで人ごとのように

居直っているので

問題はさらに複雑になっている

どちらにしても

今日の行事は別の日に差し替えるとのことで

一件落着いたのだが

たかが時計の

ゼンマイネジを巻き忘れたくらいで

こんなに大事になるなど

想像もしていなかった

今は

突然訪れた休日を

どのように過ごそうかと

思案しながら

山の中腹にある
眺めのよい東屋で
昼寝でもしようと思い
萩の花が満開の
径を進むと
昔の恋人が
悲しそうに座っているの
気づかれぬように
そっと立ち去る

考えてみれば

四十年前

いつもの軸排店でふたりが出会わなければ
あの人は幸福に暮らし
山の中腹にある東屋に
悲しそうな姿でいることもないだろう

などと

自責の念に駆られながら
山を降りると

夕暮れ

明日の朝は
同じ過ちを繰り返さぬよう
誰よりも早くゼンマイネジを巻こうと
決心していると

闇が訪れる



時折聞こえる
虫の音が
夏の終わりを告げる